

プロローグ

長寿社会が急速に進行した現在の日本において、健康に対する関心は日増しに高まりをみせている。とくに食に対する関心は“生”への根源的なものであることから、食材のみならずこれを咀嚼する口腔機能にまで関心が及び、咀嚼機能に携わる歯科の果たす役割はますます大きなものとなっている。なかでも、年齢を重ねるほどオーラルフレイルと口腔機能低下に対する咀嚼機能の安定には、われわれ歯科医師の存在が不可欠である。

デンタルインプラント治療が全盛の昨今ではあるが、臨床の現場ですべての患者がインプラントを希望するわけではないことを多々経験する。近年はインプラント治療の予後、たとえば要介護状態となった患者のメンテナンスが行いにくい状況に端を発したインプラント周囲炎への対応など、超高齢化に伴う種々の問題も耳にする。現実的には、無歯顎者への咀嚼機能の改善は義歯治療が主体をなすと考え。しかし、いざ義歯を製作しても患者の“痛い、外れる、噛めない”の訴えは減らず、「なかなか義歯はうまく作れない」との声を聞くことは決して珍しくない。ましてや保険外診療での、決して安価とはいえない義歯を製作したにもかかわらず、患者満足が得られない結果となってしまっは元も子もないといえよう。

では、なぜうまく作れないのか？ 巷の歯科医師との会話で「義歯は難しい」との声をよく聞く。いまでも「義歯の基本」は変わらない。使用する材料や器材も大して変わってはいない。義歯製作のノウハウやテクニックは教科書にも、そして昭和、平成を経て令和となった現代においても、歯科商業誌には義歯製作に関する特集が数多く組まれ、誌面を賑わせている。さまざまなデジタル機器が進化、発展、汎用化した現在、歯科医師はそれらに目を奪われ、基本技術が蔑ろになっていないだろうか？ デジタルテクノロジーの発展が隆盛を極める現代においても、義歯治療の対象の多くが高齢者であることを含め、接遇をはじめとして術者の技術以外にもアナログ的な要素が多いと考える。

本書では、義歯の基本技術を突き詰め、製作に関するさまざまな要素を再確認し“痛い、外れる、噛めない”理由を考え、トップダウンで考える“違和感のない、外れない、噛める、飲み込める”義歯を作り上げるための義歯製作法“今井メソッドデンチャー”（通称：すっぱんデンチャーの進化形）を紹介する。

保険診療の範囲内であっても片側性咬合平衡の得られた、リンゴ丸かじりさえ可能な全部床義歯が製作できれば、昨今の経済情勢や基礎疾患等の身体的事由で、インプラント治療を施術しにくい患者にとっては朗報となるといっても過言ではない（**図1-01**）。また、不幸にもインプラントが不成功に終わった患者にとってはリカバリー義歯として十分に満足し得るものとなる。後がない高齢無歯顎者にこそ必要な技術といえる。しかし、これは決して独自で考

1-01 保険診療でもリンゴ丸かじり！



義歯装着後、咀嚼力の劣る要介護者以外ほぼすべての患者はリンゴ丸かじり（連続咀嚼）が可能である

案したものではない。先達が築き上げ体系化された、これまでの義歯製作法を基本として、われわれの臨床経験を加味したものである。治療のゴールは皆同じである。誰もが納得して再現性をもってできるように、その理論を整理し、術者の習熟度による差異を極力減じることができるように、術式のシンプル化を意識して執筆した。わかりやすさを前面に出すため、少くどい説明となるところはお容赦願いたい。決して一部のための特殊な義歯製作法ではなく、ごく普通の、欠損補綴を希望して来院する患者への義歯製作法こそがわれわれに与えられた課題と考える。今回、デンタルダイヤモンド社からお声掛けいただいたことはたいへん嬉しいかぎりである。また、多大なるご助言をいただいた大阪大学大学院歯学研究科特任教授・前田芳信先生をはじめ、ぐみょう今井歯科医院スタッフに深甚なる感謝を申し上げる。義歯に悩むすべての歯科医師の技術向上に少しでも役立つことができれば望外の喜びである。

令和二年秋

今井守夫